



[目次]

公 告

第7回（2009年度）「生態学会賞」候補者推薦のお願い

第13回（2009年度）「日本生態学会宮地賞」候補者募集

第2回（2009年度）「日本生態学会大島賞」候補者募集

日本生態学会第56回大会案内..... 1

生態学会大会の運営について（福岡大会より）..... 4

記 事

I. 学会賞各賞受賞者の決定 7

II. 書評依頼図書..... 7

III. 寄贈図書..... 7

IV. 後援・協賛..... 8

V. 交換雑誌目録..... 8

お知らせ

1. 公募..... 8

書 評..... 8

公募カレンダー..... 13

京都大学生態学研究センターニュース..... 14

◆会費

会費は前納制で、学会の会計年度は1月から12月までです。

新年度の会費は12月に請求をします。会費未納者に対しては6月、9月に再請求します。

下記会費（地区会費）を次の口座にお振込ください。

郵便振替口座番号 01070-6-19256 口座名：日本生態学会

退会する際は前年度内に退会届を事務局まで提出してください。

会費滞納2年で会誌の発送停止となり、3年で退会処分となります。

会員の区分と個人会員の権利・会費

		A 会員	B 会員	C 会員
配布 *	Ecological Research + 生態誌	○	○	
	保全誌		○	○
投稿 **	生態誌	○	○	
	保全誌	○	○	○
大会発表	全セッション	○	○	
	自由集会	○	○	○
総会・委員 (選挙・被選挙権)		○	○	○
年会費	正会員	11,000	13,000	5,000
	学生会員	8,000	10,000	2,500
	団体会員	20,000	22,000	14,000

*Ecological Research および生態誌については2007年度より冊子を必要としない会員への割引（ER 900円、生態誌 600円）を開始しました。すでに会員の方が今後申請される場合は2009年度以降の適用となります。新たに入会される方は入会時に申請があれば入会年度より適用されます。

**Ecological Research への投稿権利は従来通り会員に限定しません。

地区会費（正・学生会員のみ）

北海道地区：200円 東北地区：800円 関東地区：600円 中部地区：0円

近畿地区：400円 中国・四国地区：400円 九州地区：700円

問い合わせ先：日本生態学会事務局

〒603-8148 京都市北区小山西花池町 1-8

Tel&Fax 075-384-0250 E-mail kaiin@mail.esj.ne.jp

公 告

第 7 回（2009 年度）「日本生態学会賞」

候補者推薦のお願い

「日本生態学会賞」は、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たした本学会員に対して授与される日本生態学会の最も権威ある賞です。細則にありますように、受賞者は会員から推薦された候補者の中から選考され、大会時において表彰されます。

このたび、第 7 回の授賞に先立ち、会員の皆様に受賞候補者の推薦をお願いいたしたく存じます。この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、下記の要領で奮ってご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2008 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの推薦用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2008 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会賞細則

- 第1条 日本生態学会賞は、本学会員で、顕著な研究業績により生態学の深化や新たな研究展開に指導的役割を果たし、本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、受賞は毎年原則として1名とする。
- 第2条 日本生態学会賞候補者を選考するため、日本生態学会賞候補者選考委員会（以下委員会）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は全国委員の推薦により9名を選出するが、生態学の各分野に偏りの無いように配慮する。委員長は委員の互選により毎年定める。委員の任期は3年とし、毎年3名を改選する。ただし任期満了後2年間は再任されない。
- 第4条 推薦者は、推薦理由を添えて候補者を推薦するとともに、委員会の求めに応じて必要な資料を提出しなければならない。
- 第5条 委員会は推薦理由をもとに受賞候補者を絞り、推薦者が提出する資料にもとづいて若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、原著論文業績の他に啓蒙的役割を果たした著書類及びそれらの国内外の波及効果に留意する。
- 第6条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第7条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第8条 受賞者の決定は、受賞式が行われる3ヶ月前までに行う。
- 第9条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状及び記念品を贈呈する。
- 第10条 受賞者は、原則として、その授賞式が行われる大会において記念講演し、その内容を本学会の学会誌に総説として投稿する。
- 第11条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第7回（2009年度）「日本生態学会賞」 受賞候補者推薦用紙

日本生態学会賞選考委員会委員長殿

下記の者を、日本生態学会賞に推薦いたします。

2008年 月 日

推薦者氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名：

生年月日：

所属：

連絡先：

2. 推薦理由

3. 主要な業績

切
り
取
り
線

公 告

第 13 回（2009 年度）「日本生態学会宮地賞」 候補者募集

「日本生態学会宮地賞」は生態学に大きな貢献をしている本学会の若手会員に対して、その研究業績を表彰することにより、わが国の生態学の一層の活性化を図ることを目的とするものです。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 3 名の受賞者を選考し、「日本生態学会宮地基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2008 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の若手会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会宮地賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2008 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会宮地賞細則

- 第1条 日本生態学会宮地賞（以下宮地賞という）は、生態学の優れた業績を挙げた本学会の若手会員で、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として3名とする。
- 第2条 宮地賞受賞候補者を選考するため、宮地賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては、日本生態学会の英文誌または和文誌への本人の掲載論文の有無、及び会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となった場合で、選考の最終段階に候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および宮地基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究業績について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

(1998年3月26日改訂)

(2000年3月10日改訂)

(2002年3月28日改訂)

(2006年3月24日改訂)

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日改訂)

第13回(2009年度)「日本生態学会宮地賞」 受賞候補者応募(推薦)用紙

日本生態学会宮地賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会宮地賞に応募(推薦)いたします。

2008年 月 日

応募者(または推薦者)氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募(推薦)理由

3. 受賞対象となる研究内容(なるべく具体的にお書き下さい。書ききれない場合は別紙添付可)

4. 業績目録(A4版の別紙に、論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい)

5. 主要論文の別刷(5編以内を添付願います)

6. 会員歴(学会入会年、学会での研究発表歴など)

切
り
取
り
線

公 告

第 2 回（2009 年度）「日本生態学会大島賞」 候補者募集

「日本生態学会大島賞」は例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とした賞です。

会員の自薦による応募者、もしくは会員から推薦された者の中から原則として 2 名の受賞者を選考し、「日本生態学会大島基金」から各々 10 万円の賞金が贈呈されます。

受賞候補者の募集を下記の要領で行いますので、この賞の趣旨を充分ご理解のうえ、奮ってご応募、ご推薦頂きますようお願い申し上げます。

2008 年 4 月 1 日
日本生態学会会長
矢原 徹一

記

1. 受賞候補者の条件：本学会の中堅会員
2. 書 式：本誌綴じ込みの応募（推薦）用紙（別紙添付可）
3. 送付先：〒 603-8148 京都市北区小山西花池町 1 - 8
日本生態学会事務局気付
日本生態学会大島賞選考委員会委員長
4. 締め切り日：2008 年 8 月 15 日（必着）

以 上

日本生態学会大島賞細則

- 第1条 日本生態学会大島賞（以下大島賞という）は、例えば野外における生態学的データの収集を長期間継続しておこなうことなどにより生態学の発展に寄与している本学会の中堅会員を主な対象とし、自薦による応募者もしくは本学会員により推薦された者の中から、以下に述べる選考を経て選ばれた者に授ける。なお、授賞は毎年原則として2名とする。
- 第2条 大島賞受賞候補者を選考するため、大島賞受賞候補者選考委員会（以下委員会という）を設ける。
- 第3条 委員会の委員は日本生態学会賞候補者選考委員が兼ねる。
- 第4条 委員会は若干名の受賞候補者を選び、選定理由を付けて会長に報告する。なお、受賞候補者が無い場合も、その旨を会長に報告する。選考にあたっては研究の継続期間や会員歴にも留意する。
- 第5条 選考委員が被推薦者となり選考の最終段階まで候補として残った場合には、選考委員会からはずれるものとする。
- 第6条 会長は委員会が選定した候補者について、その賛否を全国委員会に諮り、有効投票のうち3分の2以上の賛成がある場合、これを受賞者として決定し、直ちに本人に通知をする。また、受賞候補者が無い場合には、全国委員会の了承を受けて、受賞者が無いことを会員に公表する。
- 第7条 受賞者の決定は11月中旬までに行う。
- 第8条 授賞式は大会において行い、受賞者には賞状および大島基金より賞金10万円を贈呈する。
- 第9条 受賞者は受賞の対象となった研究課題について、原則として、その授賞式が行われる大会において講演し、その内容も含めた総説・解説等を本学会の学会誌に投稿する。
- 第10条 この細則の変更には全国委員会の3分の2以上の同意を要する。

付則 この細則は2007年3月22日から適用する。

(2007年3月21日制定)

第2回（2009年度）「日本生態学会大島賞」 受賞候補者応募（推薦）用紙

日本生態学会大島賞選考委員会委員長殿

下記のごとく、日本生態学会大島賞に応募（推薦）いたします。

2008年 月 日

応募者（または推薦者）氏名： 印

連絡先：

記

1. 受賞候補者

氏名： 生年月日：

所属：

連絡先：

2. 応募（推薦）理由

3. 受賞対象となる研究内容（なるべく具体的にお書き下さい。書ききれない場合は別紙添付可）

4. 業績目録（A4版の別紙に、論文業績、学会等での研究発表などを重要と思われるものより順にお書き下さい）

5. 主要論文の別刷（5編以内を添付願います）

6. 会員歴（学会入会年、学会での研究発表歴など）

切
り
取
り
線

日本生態学会第 56 回大会案内

日本生態学会第 56 回大会（公式略称 ESJ56）は、大会実行委員会および大会企画委員会により、下記の要領で開催されます。

連絡先

〒 020-8550 盛岡市上田 3-18-34

岩手大学 人文社会科学部 環境生物学研究室 気付

日本生態学会第 56 回大会（ESJ56）実行委員会

担当：由井正敏（大会会長）、牧陽之助（大会実行委員長）

電子メール taikai@mail.esj.ne.jp

大会公式ホームページ <http://www.esj.ne.jp/meeting/56/>

本大会に関する問い合わせは、大会公式ホームページにある問い合わせページからお願いします。大会に関する最新情報は、ホームページで確認ください。

大会の概要

本大会では、シンポジウム、フォーラム、一般講演（口頭・ポスター）、企画集会、自由集会、総会、受賞講演会、懇親会を行います。シンポジウムの開催形式、企画集会、自由集会につきましては、「**シンポジウム企画案の公募**」と「**企画集会と自由集会**」をご覧ください。

本大会は、日本生態学会員ではない方も参加できます。ただし、講演やシンポジウム等の企画提案をするには、日本生態学会員になっていただく必要があります（入会手続きについては <http://www.esj.ne.jp/esj/> を参照してください）。

会場・日程

本大会は岩手県立大学を主会場として 2009 年 3 月 17 日（火）から 21 日（土）に開かれます。日程等の詳細は次号のニューズレターでお知らせします。

〒 020-0193 岩手県岩手郡滝沢村滝沢字菓子 152-52 岩手県立大学

URL: <http://www.iwate-pu.ac.jp/>

提案、申し込みなどの締め切り

各種申し込みの締め切り予定は以下の通りです。シンポジウム企画提案は 2008 年 5 月 26 日（月）から受け付けます。他の申し込み開始は、締め切りの 1 ヶ月前程度から受付ける予定です。これらのスケジュールに変更がある場合もありますので、**適宜、大会ホームページで確認ください。**

シンポジウム企画提案	2008 年 7 月 11 日（金）17:00
企画集会申し込み	2008 年 10 月 24 日（金）17:00
自由集会申し込み	2008 年 10 月 24 日（金）17:00
一般講演申し込み	2008 年 11 月 14 日（金）17:00
講演要旨登録	2009 年 1 月 9 日（金）17:00
プレゼンファイル登録	2009 年 3 月 6 日（金）17:00

シンポジウム企画案の公募

第56回大会では、前回大会と同じ要領で、大会シンポジウムの**企画案**を会員から募集します。大会の中心となる集会となりますので、下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

- ・企画案は講演者が決まっていないシーズ段階のものでもかまいません。
- ・海外研究者の招聘のリクエストも歓迎します。招聘費用を大会費用からまかなうことが出来る場合があります。
- ・他分野との交流を深めるため、生態学会員以外の方に招待講演をしていただくことも可能です。
- ・若手研究者からも意欲的な提案を期待しています。
- ・大会企画委員会は応募された企画案を検討し、大会全体のバランスに配慮して、採択する提案を決定します。
- ・採択された企画の提案者には**オーガナイザー**としての参加を要請します。オーガナイザーは日本生態学会A会員とB会員に限ります。
- ・大会企画委員会は**コーディネータ**を出して各シンポジウムの企画運営を支援し、シンポジウム間の調整を行います。
- ・企画案が多数寄せられ会場のキャパシティを超えてしまう場合や、内容的にシンポジウムとしての開催が難しいと判断される企画がある場合は、企画集会や自由集会として再提案していただくことがあります。
- ・シンポジウムの開催時間は約3時間の予定です。
- ・大会シンポジウムの企画は、2008年7月11日（金）17:00までに大会公式ホームページからご提案下さい。

企画集会と自由集会

第56回大会では、前回大会と同じ要領で、企画集会と自由集會を募集します。企画集会と自由集會は一括して募集され、受付後に企画者の希望を考慮し、大会企画委員会によって企画集会と自由集會に割り振られます。下記の趣旨をご理解のうえ、奮ってお申し込みください。

企画集会

- ・企画集会には、大会参加費を支払った人に限って参加できます。
- ・企画集会の個別の講演の要旨は、講演要旨集に掲載されます。全体の趣旨説明と概要もプログラムと講演要旨集に掲載されます。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。

自由集会

- ・自由集会では、全体の趣旨説明と概要のみがプログラムと講演要旨集に掲載され、個別の講演の要旨は掲載されません。
- ・一般講演、シンポジウムなどとの**重複発表は認められませんが**、原則として日程の調整は行いません。
- ・自由集会の時間枠は、大会初日の各種委員会や全国委員会と並行した時間帯や、大会最終日に設定される可能性が高くなります。

企画集会、自由集会ともに、企画者はC会員を含む日本生態学会会員に限ります。企画集会または自由集会の開催を希望される方は、2008年10月24日（金）17:00までに大会公式ホームページからお申し込みください。

いずれの集会についても、大会企画委員会は内容に関与しませんが、概要などに特定の個人を傷つける内容を含むと判断されるものについては、その限りではありません。企画集会、自由集会とも開催時間は約2時間の予定です。

提案された企画集会・自由集会の数が会場の収容可能数を上まわる場合には、同一会員が重複して複数の集会の企画者となっている提案からご遠慮いただきます。次に、大会シンポジウム企画者による提案にご遠慮いただきます。それでも数が多い場合には、自由集会は抽選によって採否を決定します。これらの制限は、限られた場所と時間に対して、たくさんの企画者の提案を順序立てて受入れるための措置ですので、ご了承ください。

開催の可否については、11月21日（金）までにメールでご連絡します。

フォーラム

学会内の各種委員会等によって企画されるフォーラムを数件開催する予定です。フォーラムとは、各種委員会から提案され、生態学会が取り組んでいる生態学に関連する課題について広く会員の意見を募り、会員相互の情報共有を促すことや、広範な議論により学会内の合意を形成することを目指すものです。なお、フォーラムの企画やフォーラムでの話題提供は、重複講演制限の対象となりません。

一般講演

一般講演には口頭発表とポスター発表があります。申し込み時に希望をお聞きますが、会場の都合でご希望に沿えない場合もあります。

口頭発表では、英語での発表・討論を経験する機会を提供し、日本語を解さない参加者との交流を図るために、英語での発表を歓迎します。ただし、英語での発表の申し込み数によっては、分野にこだわらずに英語での発表を集めたセッションに回っていただく場合があります。

発表内容に応じて会場・時間の割り振りやポスター賞のグループ分けを行うため、発表申し込み時に適切な分野を以下のうちから3つまで選んでいただきます。**分野追加についてのご要望は、大会公式ホームページのお問い合わせのページからお寄せください。**

群落／植物個体群／植物生理生態／植物繁殖／植物生活史／送粉／種子散布／菌類／
微生物／景観生態／遷移・更新／フェノロジー／動物と植物の相互関係／進化／種多様性／
数理／動物群集／動物繁殖／動物個体群／動物生活史／行動／社会生態／分子／古生態／
保全／生態系管理／外来種／都市／物質生産／物質循環／生態学教育・普及

注意：

- ・一般講演の演者（登壇者及び主たる説明者）は、日本生態学会 A 会員と B 会員に限ります（共同発表者は会員である必要はありません）。
- ・一人で二つ以上の講演の演者になることはできません（共同発表者になることは差し支えありません）。
- ・さらに、シンポジウムの**企画者・講演者は一般講演は行えません（口頭・ポスターとも）**。これらの制限は、いずれも限られた場所と時間を分け合って使うための措置ですので、ご了承ください。

ポスター賞

若手研究者を奨励するために、優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター賞の運営、審査は前回大会に準じて行う予定です。詳細は大会プログラムに掲載しますので、ポスターを準備するときの参考にしてください。

諸経費と納入方法

大会参加費、懇親会費などは前回大会に準じた設定とする見込みです。諸経費の納入方法については、次号のニュースレターで詳しくお知らせします。

エコカップ 2009

大会サテライト企画として、親善フットサル大会 エコカップ 2009 が行われます。主催はエコカップ 2009 実行委員会です。詳細は追ってホームページでお知らせします。

ご意見

大会企画委員会では、大会運営についてのご意見を随時受け付けています。大会公式ホームページにある問い合わせページからお寄せください。

生態学会大会の運営について（福岡大会からのメッセージ）

齊藤 隆（大会企画委員会前委員長）

日本生態学会福岡大会を大成功の内に終えることができました。大会企画委員会を代表してまずお礼を述べさせていただきます。大会の成功は会員、参加者の皆様のご協力の賜物です。ありがとうございました。

福岡の実行委員会をさしおいて、大会企画委員会の立場から大会を総括し、今後の対応などについて説明することは、僭越だと承知していますが、本ニュースレターの「大会案内」にあるようにすでに盛岡大会の準備が始まっていますので、前大会企画委員長の個人的な見解として、大会運営の基本的な考え方、今後の対応の方向性について説明させていただきます。

精確な集計結果はまだ届いていませんが、福岡大会の参加者は2,000名を超えたと思われまじし、一般講演は1157題（口頭発表：235、ポスター発表：922、キャンセルは除いていない）に達しました。これは、もちろん過去最高の規模です。約4,000名の会員の半数ほどが大会に参加する活気のある学会として大いに誇るべき数字だと思います。

しかし、大会の運営は規模が大きくなると、「量は質に転化する」という言葉通り、これまでのやり方では手に負えない問題がたくさん出てきます。2,000人分の参加登録データをチェックする、プログラム、要旨集の編集や内容の確認をする、時間と部屋割りに制約がある中で、講演内容を考えながら1157題の講演を配置することなどを手作業で行うことを想像していただけると、大会運営が大きな曲がり角に来ていることをおわかりいただけると思います。1,000人を超える大会の運営にはプロが関わるのが常識だと言われています。

また、会場も大きな問題です。2,000人の参加者が快適に講演したり、聴講できる大きな会場は限られています。ご承知の通り、福岡大会では大変立派な国際会議場を使うことができました。参加者の皆さんには満足いただけたものと思います。

生態学会に予算が潤沢にあれば、立派な会場を使い、運営を外部に委託することが可能でしょう。しかし、その予算はどこから調達すればよいのでしょうか？特定の産業と結びついていない生態学会の場合、企業などから大きな援助を受けることは期待できませんし、特定の企業・団体と強く結びつくことは学会にとって好ましいことではありません。そうなるとう大会参加費からその予算を捻

出すこととなります。福岡大会では、国際会議場を借り切るためにこれまで以上の経費が必要となり、大会の参加費を8,000円（早期登録の一般参加）とさせていただきました（松山大会は6,500円）。また、会場経費をできるだけ少なくするために大会の期間を1日短くし4日間としました。このような予算状況で運営を外部委託することは不可能です。仮に運営を外部委託するならば、参加費をさらに2,000-3,000円上乗せする必要があるでしょう。しかし、参加費が10,000円を超えてしまう大会の開催を会員が望んでいないことは明らかです。

限られた予算、人的資源、会場スペースの中で、参加者が増え続ける大会をどのように運営していくのか？このような問題について生態学会は、2000年から「大会のあり方」について検討を重ね、2005年に学会内に常設の大会企画委員会（以下、企画委員会）を立ち上げ、実行委員会と企画委員会の協力によって大会を運営することにしました。

企画委員会は全国の会員から選任された40人ほどの委員からなる組織で、ボランティア精神のもとに大会の運営や検討にあたっています。運営部会、プログラム編成部会、シンポジウム部会、ポスター発表部会に分かれて、プログラム編成（プログラム編成部会）、登録受付、要旨集の編集・印刷（運営部会）、シンポジウムの企画・運営（シンポジウム部会）、研究集会（企画集会、自由集会）の編成（シンポジウム部会）、ポスター発表・ポスター賞の運営（ポスター発表部会）などを行っています。これらの仕事を継続して担当することによって、大会運営についての経験を蓄積し、負担の少ない大会運営システムの構築にむけて努力を続けています。また、中長期視点に立って大会のあり方そのものを検討することも企画委員会の重要な役割です。

企画委員会は、活気に満ちた大会を外部の業者の力に頼らず我々の手でどのように運営するのかについて日々検討を重ねています。可能ならば、参加者個々の要望に丁寧に対応して大会を運営したいと思っておりますが、2,000名の参加者の個々の事情を斟酌することがどれほど大変なことかは想像いただけたと思います。ボランティアによる手作りで、2,000名規模の大会を運営するには省力化が不可欠であることをご理解ください。大会運営の省力化を進め、運営を担当する会員の負担を減らす

ことは、将来、運営にかかわる可能性がある皆さんへの責任でもあるし、すべての学会員への責任でもあります。大会運営の負担が増え続けたなら、やがて運営の引き受け手がなくなってしまうでしょう。

省力化の最大の「武器」はオンライン処理です。送られてきた紙の申込書を見ながら手で入力するのではなく、申込者がオンラインで申し込んだ情報をそのままサーバ上に保存し、これを一括して自動処理することで、大幅な省力化が実現されています。しかし、登録などを締め切ってから作った印刷原稿に、あとから変更を加えるのは手作業です。一括処理のシステムを作ってしまうえば1,000件も2,000件も処理の手間は変わりませんが、手作業が一件でも加わるとたちまちめんどろなことになります。それも一ヶ所だけでなく、プログラム、参加者リスト、要旨集、およびこれらのウェブ掲載版などで不整合が生じないように気をつけながら修正するのは、とても神経を使う仕事です。省力化のためだけでなく、ミスの混入を避けるという観点からも、手作業での修正は大敵です。

ですから、企画委員会では皆さんに「締め切りの厳守」を繰り返してお願ひしています。

もし、皆さんの中に、「生態学会の会員であり、大会参加費を支払ったのだからサービスを受ける権利がある」とお考えになる方がいらしたら、どうかその考え方を改めてください。大会を運営しているのは参加者の皆さんと同じふつうの学会員です。各種締め切りなどの日程をにらみながら、研究・教育・その他の仕事と時間のやりくりをして運営にあたっています。そのような委員にサービスを求めるのではなく、皆さんも我々と同じように大会の運営にご参加ください。その第1歩が「締め切りの厳守」であると理解いただけると幸いです（詳しくは「締め切り厳守をお願いする理由」について、大会ホームページ：http://www.esj.ne.jp/meeting/info/why_so_inflexible.html をご覧ください）。

大会の運営には様々な問題がありますが、最大の問題が「数」であることはご理解いただけると思います。会場、日程の制約の中で現在の所、発表の場の確保を最優先に考えています。シンポジウム、集会（企画集会、自由集会）、一般講演の数は増加しており、会場の確保は綱渡りの状態です。皆さんから提案いただいた集会をできるだけ開催したいと考えていますが、福岡大会の準備段階では会場数が足りずに自由集会の提案を抽選で選択することが検討されました。しかし、実行委員会の奔走により会場数を増やすことができ、なんとかすべての提案を開催す

ることができました。

発表の場の確保を最優先にすることによって別の問題が発生します。福岡大会のプログラムをご覧になってお気づきの方も多いたと思いますが、プログラム編成にほとんど余裕がありませんでした。プレナリー講演としたかった受賞講演と平行して自由集会や公開講演会を開催したことは「苦肉の策」と申し上げる他はありません。また、関連性のあるシンポジウムは重複させないで欲しいとの要望に充分に対応できなかったことも承知しています。しかし、数十件の集会を限られた日程、会場に押し込む作業は難解なパズルを解くようなもので、担当部会は実行委員会、シンポ部会、運営部会からの意見を聞きながらまさに神経をすり減らしてプログラムを編成しました。今、我々に言えることは、与えられた条件の中で、すべての参加者が重複による不便を感じないパーフェクトな解はなかった、ということです。盛岡大会は会期が1日延ばされるので、プログラム編成に少し余裕を持たせることができるかもしれません。

大変立派な会場を用意していただいたポスター会場も決して余裕がある状態ではありませんでした。「ポスターの間隔に余裕をとって欲しい」、「関連のあるポスターを近くに配置して欲しい」などの要望があることは承知しています。盛岡大会での検討課題とさせていただきます。

私たちは大会を日本生態学会の活力の源だと考えています。大会での発表を機会に会員になられた方も多いたと思います。また、自由な形式の研究集会（企画集会、自由集会）は新しい研究課題を育む孵化器のような機能を果たしていると思います。自由集会からこれまでたくさんの研究が巣立っていきました。ですから、このような活力源となっている発表の場の確保を最優先課題として大会の運営にあたっていきたいと考えています。

「数」のことばかり説明してきましたが、大会の内容をより充実したものにする努力も忘れてはいけません。福岡大会から新たなシンポジウムの運営方法を導入しました。それは、会員から企画を募集し、企画委員会からコーディネータを出して提案者と協力してシンポジウムを企画運営するもので、「コーディネータ制」と呼んでいます。コーディネータ制の利点は、(1) 企画の詳細が固まっていなくても気軽に提案できる、(2) コーディネータ間で類似企画の調整をできる、(3) コーディネータの助言などによって演者の幅が広がる、(4) コーディネータがシンポ内容を熟知できるので、適切なプログラム編成ができる、などたくさんあり、福岡大会でも好評でした。この制度によってシンポジウムの内容は今後さら

に充実したものになるでしょう。どうぞ積極的にシンポ企画をご提案ください。

一方、「国際化問題」は模索が続いています。「日本の大学院生たちが、一人前の研究者となるには英語による研究成果の発表、討論、共同研究を遂行する能力が必要」という指摘を受け、企画委員会は英語のシンポジウム開催や英語講演を奨励していますが、大会の中にまだ充分には根付いていません。福岡大会でも内容的には充実している英語のシンポジウムの参加者数がかならずしも多くなかったこと、一般講演では英語での発表希望者数が少なく、結果として内容の関連性が薄い発表を集めた英語セッションに配置することになり、セッションとしてのまとまりに欠けてしまったことなど、国際化に関して満足できるレベルに達していません。国際化に向けて、意識の高まりが不十分ということもあるかもしれません。

このほかにも検討中の課題は「メジロ押し」です。先ほど、発表の場を確保することを優先させてきたと書きましたが、研究集会に関するすべての提案を受理できるのかどうか毎回綱渡り状態にあります。これまでのアンケート結果などから大会の会期は5日間が上限だろうと判断しています。増加する研究集会と一般講演の数に対しては、これまで、会場数を増やすこととプログラム編成の「妙」でやりくりしてきましたが、「やりくり」も限界に近づいています。集会の総数を絞る必要はないか、などについて皆さんのご意見を伺うことになるかもしれません。

大部となって持ち歩きにくくなった要旨集の電子化も具体的に検討されています。すでに印刷体を廃止し、CDやオンラインで要旨を提供している学会もあります。福岡大会では要旨集を2,300部印刷し、その総量は2.5トンになりました。要旨集を電子化し、省資源に貢献することは生態学会に相応しいあり方のように思います。印刷体に対する需要や電子化した場合の問題点などについて整理し、皆さんのご意見を伺うことになると思います。

以上のように、企画委員会は毎日のようにメールを交換して、大会の充実について議論を深めています。会員が4,000名もいるのですから、大会のあるべき姿に対して多様な意見があるはずで、とても私一人が把握できるものではありませんし、企画委員会だけの考えを強く打ち出しても機能しないでしょう。私は、多くの会員が大会の運営に参加することによって、多様な要望を反映した内容の充実が実現されると考えています。どうか皆さん、シンポ企画、ポスター賞審査などに協力くださり、大会の運営により深く関わってください。そして、機会がありましたら、大会企画委員となって、活躍の場を広げてください。より多くの会員が大会の運営に関わることが大会のより一層の充実、日本生態学会の発展につながると思います。

企画委員会は、永田尚志新委員長のもとで4月から新任期を迎えます。福岡大会の成果と課題を受けて、よりよい大会の実現を目指して検討を深めて参りますのでよろしく願いいたします。

記 事

I. 学会賞各賞受賞者の決定

学会賞各賞の受賞者は下記のように決定しました。

1. 第6回日本生態学会賞
受賞者なし
2. 第6回日本生態学会功労賞
西平守孝（名桜大学総合研究所）
藤井宏一（元筑波大学）
3. 第1回日本生態学会大島賞
古賀庸憲（和歌山大学教育学部）
正木隆（森林総合研究所森林植生研究領域）
4. 第13回日本生態学会宮地賞
石井博（東京大学大学院農学生命科学研究科保全生態学研究室）
鏡味麻衣子（東邦大学理学部生命圏環境科学科）
杵掛展之（総合研究大学院大学先端科学研究科生命共生体進化学専攻）
森田健太郎（水産総合研究センター北海道区水産研究所）

II. 書評依頼図書（2007年9月～2008年3月）

現在、下記の図書が書評依頼図書として学会事務局に届けられています。書評の執筆を希望される方には該当図書を差し上げます。ハガキ又はEメールで、ご所属・氏名・住所・書名を学会事務局（office@mail.esj.ne.jp）までお知らせ下さい。なお、書評は1年以内に掲載されるようご準備下さい。

1. 京都大学総合博物館・京大学生態学研究センター編「生物多様性ってなんだろう生命のジグソーパズル」(2007) 314pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-827-3
2. 西田利貞著「人間性はどこから来たのかサル学からのアプローチ」(2007) 364pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-87698-826-6
3. 中道正之著「ゴリラの子育て日記—サンディエゴ野生動物公園の優しい仲間たち—」(2007) 230pp. 昭和堂 ISBN:978-4-8122-0765-9
4. 太田誠一編「生物資源から考える21世紀の農学第4巻森林の再発見」(2007) 404pp. 京都大学学術出版会 ISBN:978-4-8769-339-1
5. 長澤良太・原慶太郎・金子正美編「自然環境解析のためのリモートセンシング・GISハンドブック」(2007) 258pp. 古今書院 ISBN:978-4-7722-4109-0
6. 渡辺守著「昆虫の保全生態学」(2007) 200pp. 東京大学出版会 ISBN:978-4-13-062215-8
7. 針山孝彦著「生き物たちの情報戦略」(2007) 248pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-1311-1
8. 藤原晴彦著「似せてだます 擬態の不思議な世界」(2007) 208pp. 化学同人 ISBN:978-4-7598-7302-93
9. 『変わりゆく信州の自然』編集委員会編著「変わりゆく信州の自然」(2008) 140pp. ほおずき書籍 ISBN:978-4-434-11557-8
10. 財団法人日本学術協力財団「学術会議叢書 14 性

- 差とは何か」(2008) 312pp. ISBN:978-4-939091-23
11. R.Flindt 著・浜本哲郎訳「数値でみる生物学 生物に関わる数のデータブック」(2007) 290pp. シュプリンガー・ジャパン ISBN:978-4-431-10014
 12. 石川統編「生物学第2版」(2008) 234pp. 東京化学同人 ISBN:978-4-8079-0674-1
 13. 種生物学会編「共進化の生態学：生物間相互作用が織りなす多様性」(2008) 368pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1069-6
 14. 寺澤和彦・小川浩正編「ブナ林再生の応用生態学」(2008) 312pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1071-9
 15. 正木隆編「森の芽生えの生態学」(2008) 264pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-1070-2
 16. 日本生態学会編「エコロジー講座 森の不思議を解き明かす」(2008) 88pp. 文一総合出版 ISBN:978-4-8299-0135-9
 17. 深泥池七人委員会編集部編「深泥池の自然と暮らし—生態系管理をめざして—」(2008) 248pp. サンライズ出版 ISBN:978-4-88325-357-9

III. 寄贈図書

1. 「鹿島学術振興財団第31回2006年度年報」(2007) 340pp. 財団法人鹿島学術振興財団
2. 「財団法人下中記念財団」(2007) 74pp. 財団法人下中記念財団
3. 「多摩川 第116号」(2007) 8pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団
4. 「こうえいフォーラム 第16号」(2007) 162pp. 日本工営株式会社
5. 「うみうし通信 No.57」(2007) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
6. 「応援しよう！女子中高生の理工系チャレンジ」(2007) 独立行政法人国立女性教育会館
7. 「作物研究所 年報 平成18年度 No.6」(2007) 114pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構作物研究所
8. 「東北のコウモリ 創刊号」(2007) 32pp. 特定非営利法人コウモリの保護を考える会
9. 「第57回 東レ科学振興会科学講演会記録 プレートの沈み込みとその行方」(2007) 40pp. 財団法人東レ科学振興会
10. 「2007年(第15回)花の万博記念『コスモス国際賞』報告書」(2008) 70pp. 財団法人花と緑の博覧会記念協会
11. 「果樹研究所ニュース No.20」(2008) 8pp. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構果樹研究所
12. 「小・中学校における生態園づくり 事例発表会・記録集」(2008) 34pp. 財団法人花と緑の博覧会記念協会
13. 「東京大学海洋研究所 ニュースレター No.16」(2007) 20pp. 東京大学海洋研究所
14. 「多摩川 第117号」(2008) 20pp. 財団法人とうきゅう環境浄化財団

15. 「SESSILE ORGANISMS 第25巻1号」(2008) 76pp. 日本付着生物学会
16. 「うみうし通信 No.58」(2008) 12pp. 財団法人水産無脊椎動物研究所
17. 「第14回生態学琵琶湖賞報告書」(2008) 64pp. 滋賀県

IV. 後援・協賛

日本生態学会では、下記のシンポジウム・セミナーを後援・協賛しました。

1. 横浜国立大学グローバル COE 国際シンポジウム「アジアで拓がる生態リスクと食料安全保障問題」
日時：2008年2月23日(土) 13:00～18:00
場所：横浜国立大学教育文化ホール
2. 第11回マリンバイオテクノロジー学会大会
日時：平成20年5月24日(土)～25日(日)
会場：東京大学吉田南総合館北東館
3. 日本地球惑星科学連合会2008年大会レギュラーセッション「北極域の科学」
日時：平成20年5月25日(日)～30日(金)
会場：幕張メッセ 国際会議場

V. 交換雑誌目録 (2008年4月現在)

1. Acta Zoologica Fennica
2. adansonia
3. Annales Botanici Fennici
4. Archiv fur Molluskenkunde
5. Biodiversity Science
6. Biotropia
7. Chinese Journal of Applied Ecology
8. Chinese Journal of Ecology
9. Entomologische Berichten
10. EXPLORATIONS
11. Folia Geobotanica
12. Journal of Plant Ecology
13. Journal of Taiwan Fisheries Research
14. Korean Journal of Environment and Ecology
15. Memoranda
16. MICRONESICA
17. ORSIS
18. Polish Journal of Ecology
19. Proceeding of the Academy of Natural Sciences of Philadelphia
20. Reinwardtia
21. Scientia Marina
22. Senckenbergiana Biologica
23. Sichuan Alpine Ecology Study
24. SPIXIANA
25. Svensk Botanisk Tidskrift
26. Systematics and biodiversity
27. The BIOLOGICAL BULLETIN
28. The Botanical Review
29. The Bulletin/British Ecological Society
30. Tropical Ecology

31. ЭКОЛОГИЯ
32. Хабарлары Цэвесмця

お知らせ

1. 公募

日本生態学会に寄せられた公募について、①対象、②助成又は賞などの内容、③応募締め切り、④申し込み・問い合わせ先をお知らせします。

(1) 藤原セミナー

- ①自然科学の全分野
- ②1件につき1200万円以内(開催件数2件以内)
- ③2008年7月31日(木)必着
- ④〒104-0061 東京都中央区銀座3-7-12
財団法人 藤原科学財団
TEL:03-3561-7736 FAX:03-3561-7860

(2) 平成20年度東レ科学技術賞

- ①学術上の業績が顕著な方
学術上重要な発見をした方
効果が大きい重要な発明をした方
技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献した方
- ②2件前後。1件につき賞状・金メダルおよび賞金500万円
- ③平成20年10月10日(金)必着
- ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

(3) 平成20年度東レ科学技術研究助成

- ①国内の研究期間において自らのアイデアで萌芽的基礎研究に従事しており、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者(原則として推薦時45歳以下)
- ②総額1億3千万円。1件最高3千万円程度まで、計10件程度。
- ③平成20年10月10日(金)必着
- ④日本生態学会事務局(学会推薦が必要です)

書評

遠藤秀紀著(2006)「遺体科学の挑戦」210pp. 東京大学出版会 税込価格2,900円 ISBN:4-13-063328-7

闘士。どうしようもない矛盾や不合理を背景に、たとえ変人と揶揄され、孤立しても、現れる。バリエード封鎖も投石もしない。が、紛れもなく、著者は闘士である。相手は獣医大学。およそ、無類の動物好きの人達が集う(と見なされる)ユートピアに、闘士などおよそ不似合いかも知れない。だが、イノセントな動物のお医者さん(獣医師)になることをやめ、生物科学を極めようと望んだ刹那(注:本書25頁参照)、その人間にとって獣医

大学は熾烈な革命の場となる。

獣医学の体系には、まず、獣医師法で規定される家畜や家禽の診療に従事するために、疾病の診断、治療および予防などの職能技術を授ける教育システムを包含する。それは、6年間の学部生活最後の冬、2日間にわたり実施される獣医師国家試験（農林水産省所管）で検証される。生体機能、病態、臨床および応用（注：獣医学の四大分野）（浅川、2007）の広大な領域が試験範囲となるので、教員はそのスクーリングに膨大な労力を費やす。

だが、獣医大学は単なる既知の伝授にのみ設立された教習所あるいは学校ではない。大学とは研究を基盤にした教育機関、すなわち、未知を既知にする場である。獣医大学でも同じである。職能技術に忠実に反映し、より正確に診断し、より適切に治療し、そして、より完全に予防するための研究が行われている（注：本書121頁、手術法改良参照）。

しかし、たとえば、獣医解剖学の研究であっても、その骨はどのような生物進化の過程を経て誕生し、自然界でどのような生態学的な意義を有しているのかという疑問は基本的には馴染まない。もちろん、大学で研究者としての存在意義のため、たとえ解剖学者であっても分子生物学を含む（注：本書92頁参照）より合理的な手法を使って業績を稼ぐ。が、研究の場では遺体と向き合わず、せいぜい国家試験対策のスクーリングで扱う程度と弾ずる（注：本書24頁参照）。

もちろん、このような教育（スクーリング）と研究（業績作り）との分離は、獣医解剖学だけの問題ではなく、獣医大学全般のこととして良い。さらに、問題を複雑にしているように見えるのは、先に紹介した獣医学四大分野のいずれもが、至近要因追求型の研究を遂行している。すなわち、メカニズムの解明や再現性といったことがキーコンセプトとなる。そして、多くは材料として家畜や実験動物を扱うが、たまに野生動物や動物園動物などを研究材料にはしていても、究極要因を追いかけることはしない。著者は、解剖学という獣医学の一分野を事例に戦いを挑んでいるように見えるが、実は、その母体で、著者が、別の著作で「田舎学問」と宣告されていた獣医学そのものに、改革を迫っているのであると読み取れる。

生物科学の研究は、至近要因と究極要因の両面から検討されることを理想とする。獣医学にあっても、それぞれ扱う生物現象について究極要因からの側面から説明されても良いであろう。特に、自然環境の保全、野生動物の様々な問題解決、多様な飼育動物の脱走・放逐に起因する外来種問題、自然生態系における新興・再興感染症の発生などを、獣医大学でも普通のテーマとして取り組みつつあるのだから。第一、野生動物の保護活動といったものの明確なゴールの一つには、その個体群が自然生態系で保ってきた生態的な関係を保持しつつ、本来の進化プロセスの保証ということが担保されなければならない。もっと、卑近な問題となるが、日々の診療で無脊椎動物を含む多様な生物を扱うことも増えているが、そういった生物の基礎的な臨床データは欠如している。そのような場合でも、患者が所属する生物群の進化や生態学

的な関係を基に類推して、適正な診療を試みることも必要なのである。

日本の獣医大学では年1000名ほどの獣医師を送り出しているが（現在、約三万人の有資格者が存在する）、多くは、たとえ野生動物や動物園動物の外見に惚れても、その姿の究極要因に思いを馳せることはない。だが、本書を一読した後は、きっと目から鱗が落ち、時空間を駆けめぐる獣医師に育つであろう。また、この書評を目にする多くの生態学者は、獣医学あるいは獣医師の根本的な限界を具体的に知り得ることになる。そのような限界を念頭に置きつつ、獣医師（学）を見守っていただきたい。結局、著者は、宣言をしたようにイノセントな獣医師にはならなかった。しかし、彼の闘士生活に影響を受けた獣医学徒を含む若者たちが、真の生物科学者として、今後、この国に誕生する。本書は広い読者層を期待した啓発書であるので、上記のようなねらいも垣間見える。

以上は大きな部分での感想であるが、評者自身が個人的に注目した小さな部分で二つ。まず、137頁のマレー半島にある「クラ地峡」を境にツパいの被毛色に差が認められた点について、その理由を知りたかった。体色は解剖学とは馴染まないかも知れないが、是非ともどこかで語って欲しい。ちなみに、同地域に生息するリス類はそのような差異はなかったという。これも気になる（注：評者は、著者が組織する調査班で得られたサンプルについて、寄生虫の分析をさせてもらっている立場上の希望でもある）。もう一つ。127頁から次の頁、パンダ掌の偽親指に発達した筋肉の存在意義。「哺乳類学会学術集会」という集まりには、「形の学校」という柔らかい雰囲気の中で討論をする場がある。数年前、著者が話題提供をしていたが、その場で、評者は

「なぜ、結合組織や脂肪などではなく、筋肉という贅沢な組織をわざわざ投資したのか」

と質問した。が、明確なお答えを頂かず、それ以来、モヤモヤしていたが、本書129頁で見事に説明されていた。不断の戦いに挑む解剖学の闘士には、やはり敵わない。

文献

浅川満彦. 2007. 野生種を対象にした感染症の疫学研究はどのように哺乳類学に関わるのか. 哺乳類科学, 47:162-167.

(酪農学園大学獣医学部 浅川満彦)

黒川清ほか (2006) 学術会議叢書 13「科学のミスコンダクト—科学者コミュニティの自律をめざして」236pp.
(財)日本学術協力財団 本体価格1800円
ISBN:4-939091-22-8

論文一本が死活を律する昨今、きわめて重要ではあるが、間違いなく不愉快な事柄。それが「ミスコンダクト (misconduct)」である。論文データ自体の捏造、改ざん、盗用など研究遂行上で生じた不正と定義される。評者である私自身が被害者となった事例としては、ある外来性動物の食性データが別の研究者の名前で紀要に公表されたことがあった。また、評者が筆頭発表者のある学会学

術大会(いわゆる「学会発表」)の講演要旨が、「原著論文」というカテゴリーで、共同発表者により大学発行の「業績集」に使われたこともあった。こちらは、学内昇格のための道具に利されたが、その学術集の予稿集あるいは講演要旨集が独立していない体裁で、学術誌補遺として印刷されたものでは、比較的使い易いことは想像できるであろう。

このように多数の共同研究者を包含するプロジェクト型研究が普通になりつつあるのが普通になる中で、誰もが被害者になると同時に、無意識的に加害者になるかも知れない。このような意味から、とても残念ながら、本書は必読書の一つと云える。

これまで泣き寝入りしていた事象が、実は「ミスコンダクト」という名称が付いているのだというというだけでも、まず、安心したが、それでも、訴訟が難しい程度の問題の被害者として「何となく悶々とした日々」を送る多くの研究者にとって、具体的な解決法をこの本に求められない。あくまでもこういった問題があるという啓蒙に留まっているのは、残念である。第一、ミスコンダクトには論文データに付きまとう違法行為のみならず、倫理や道徳など形而上学的な部分の逸脱行為も含まれるので、結局は社会的規範の自浄作用が期待されているとされている。研究という所作が知的好奇心を満たすための行為であった古き良き時代ならいざ知らず、論文が就職、昇格、競争的予算獲得のツールとして用いられる社会が厳然として存在するのだから、それなりのルールが欲しい。が、それは今後の話題なのであろう。

そして、科学者コミュニティの総元締め、日本学術会議が主導で議論開始の契機として世に送り出したのが本書なのである。本書は二つのパートで構成されている。最初のパートは学術会議が主催してミスコンダクトの公開講演会を2005年7月に開催したが、その全講演録が記載されている。国内外の関連事例や対策などの提案が扱われている。次のパートは、日本学術会議が編集・発行している雑誌『学術の動向』の2006年8月に出版された特集記事の再掲載で、大学院や研究機関の代表による座談会と行動規範の提案が記述されている。以上のように、いずれもこの本のために特化した書き下ろしではないが、見聞きする研究者は非常に限られているので、入手しやすい形で出版されたことは意義高い。

おそらく、この書評が世に出るのは、本書が出版されたほぼ2年後であろうが、「ミスコンダクト」を扱う専門委員会は事例収集や論議を継続しているはずなので、その間の最新情報は日本学術会議のホームページに掲載されていよう。本書とともに確かめられたい。

(酪農学園大学獣医学部 浅川満彦)

兵庫県生物学会編(2007)「兵庫の自然今昔」128pp.
神戸新聞総合出版センター 税込価格 2100円
ISBN:978-4-343-00417-8

かなりの冊である。副題に『兵庫県生物学会60周年記念誌』とある。広い兵庫県を7つの地区に分け、68のポイントを選び、古い時期の写真と現在を比べて、そ

れぞれの地域に詳しい方がコメントをつけた写真集である。掲載されている写真はモノクロが約100枚、カラーが約280枚であるが、その他に安藤広重の風絵画(200年前)や田中芳男による貴重なスケッチ(1925ころ)もある。

この本が出版されるという話を聞いて評者はいくらかの期待をもった。

小中学校や高校の先生たちを中心としたこのような会はほとんどすべての府県にあるし、1940ころに設立されて60年近い歴史をもつ会も多い。同様の書物を出しておられるところもあろう。にもかかわらずあえて本書を出しておられるところもあろう。にもかかわらずあえて本書を書評として取り上げるのは二つの理由がある。まず他の同様な会と『兵庫県生物学会』との違い、その広さと高さにある。副題にある60周年というのは『兵庫県生物学会』と名のつてからのことで、その前身に1929設立の『兵庫県博物館』がある。『兵庫県生物学会』とその機関紙『兵庫生物』はこれを引き継ぎ、合わせて80年の経過をもっている。古いだけではない。この会が育てたいわゆる「昆虫少年・植物少年」の広さには驚くべきものがある。本書に「神戸生物クラブ」の一駒がある。学会のメンバーが中心となって、こどもたちに今でいう「観察会」を実施した。記事によると1959・6月の神戸市垂水区での集会では集まった子どもは900名、学会員であろうか、引率の先生を入れると1000人を超えたと書かれている。この「昆虫少年・植物少年」のなかからたくさんのナチュラリストが巣立っていった。2007秋の文化勲章受賞者の岡田節人さんもその「昆虫少年」の一人である。その他、生物学の分野に限ってもすぐに十指に余る名をあげることができよう。これは日本海から淡路島までに広がる兵庫県土の多様性、それによる生物相の多様性がものをいっているが、それだけとはいえない。

さらに評者が関心をもつのは、この手の解説はすぐに《昔はよかった。今はあれもこれもいなくなった》という嘆き節・ナツメロを聞かされるだけとなりやすい。本書でもその傾向が見受けられる。本州の中でも中央部にある兵庫県は数千年もの人為影響を受けてきた。本書に挙げられている中でも、水田開発(圃場整備)はもとより、薪炭林として利用されたいわゆる里山は全県下に広がる。生野に代表される鉱山採掘は、世界遺産の石見より古く、かつ長期にわたる。大阪城築城でも有名な六甲山の『御影石』の採石も無視できない。また赤穂から高砂の海岸は製塩業が『揚浜式』、『入浜式』、ついで『流下式』と技術革命が進むにつれ、塩田としての埋め立てがすすめられる。つまり、この書がいう兵庫県の《昔》の自然とは原生的な自然ではない。そのようなものは明治初期までですでに消えてしまった。といっても1920以降の生態系の破壊はさらにすさまじい。戦前・戦中の軍用工場用地と戦後の住宅用地造成と埋立てで、阪神地域や六甲南斜面は徹底的といつてよいほどの打撃を与えられる。西部の瀬戸内沿岸の塩田も工場用地に転用される。写真でそのあたりが示される。

さらに、本書ではあまり触れないが、港神戸を抱える兵庫県の生物相・生態系は外来生物の侵入にも脅かされている。これからの会の対応として、神戸の海上都市の帰化植物についてのコメントは兵庫県に生物学会の行く道のひとつを示唆している。曰く《原産地を遠く離れてやってくる帰化植物は、わたしたちの目を世界へと誘ってくれるでしょう。》

(朝日 稔)

伊藤嘉昭編「不妊虫放飼法、侵入害虫根絶の技術」 344pp.
海游舎 本体価格 3,800 円 ISBN:978-4-905930-38-9

タイトルだけを見ると、不妊虫放飼法の技術マニュアルと誤解されそうだが、本書が伝えようとしているメッセージはそれとは全く異なる。本書の意図は、侵入害虫の根絶事業のような分野において、技術開発に要求された課題を解決していくことが、いかに基礎的な生物学の発展につながったかを伝えることにある。特に、基礎か応用かと不毛な選択に悩んでいる若い研究者に推薦する。

本書は8章で構成されているので、各章の内容を簡単に紹介する。()は章の担当者。

1章. 不妊虫放飼法の歴史と世界における成功例 (伊藤嘉昭)。

1954年のフロリダ半島におけるラセンウジバエの根絶以来、失敗続きだった根絶事業が沖縄でなぜ成功したのかの総括。沖縄での経験から基礎研究の重要性が世界的に認知され、1994年以降の成功の時代に入るまでの歴史。

2章. 不妊虫放飼法における野生虫数推定および放飼虫数決定モデル (伊藤嘉昭、山村光司)

不妊虫放飼法では、どれだけの数の不妊虫を放飼すれば根絶に持ち込めるかを知ることが必要である。そのために、野生虫の数を時々刻々知る必要がある。また、不妊虫と野生虫の性的競争力の違いなども考慮する必要がある。沖縄のウリミバエ根絶事業で発展させた方法とその後の進歩の紹介。

3章. ウリミバエの大量増殖法 (垣花廣行)

不妊虫放飼にあたっては、野生虫との競争に負けない元気な飼育虫を大量に準備する必要がある。パイロット試験が行われた久米島では週に400万匹、沖縄全域での本事業では週2億匹のハエが飼育された。まず詳細なデータをもとに、成虫/幼虫の人工飼料、温度条件、成虫/幼虫の飼育密度、蛹の飼育法、採卵法、ガンマ線照射量などが吟味された。これだけ大量のハエを飼育する作業は実験室で数百匹程度の虫を飼うのとは質的に異なる。飼育工場を建設し、採卵、卵接種、温度管理、蛹回収など、多くのプロセスをオートメーション化することが必要となる。その苦勞が詳細なデータで示されていて迫力満点。

4章. 精子競争と雌による隠れた選択 (伊藤嘉昭)

いかに飼育条件を最適にしても、大量増殖虫は小さなケージで累代飼育せざるをえないため、狭い空間でしか交尾しない性質がだんだん発達してくる。根絶事業

の間に、雌と交尾する能力が野生虫に比べて低くなってしまう現象が発見された。さらに、野生虫の雌には大量増殖雄を避ける性質が進化するという発見もあった。これらは交尾前の性淘汰の問題であるが、交尾後にも性淘汰の問題がのこる。雌が2回以上交尾した場合、複数雄の精子が保存されるので、雌の体内では交尾後にも卵の受精をめぐる雄間の競争が起きるのである。不妊虫放飼法の研究は、近年の性淘汰の議論にも一石を投じていることがわかる。

5章. ウリミバエの体内時計を管理せよ (宮竹貴久)

累代飼育を重ねるうちに交尾時間が1時間ほど早くなることも大量増殖虫の性的競争力が低下する原因のひとつである。これは、効率よく増殖虫を得るために発育の早い幼虫を選択し、遅い幼虫を捨てて累代飼育したためであった。幼虫発育期間と体内時計の測時機構に遺伝相関が発見されたのである。ほかにも繁殖と寿命の間にも遺伝的なトレードオフが検出されている。4章を含め、大量増殖虫の質的管理には、進化に関するいろいろな課題が隠れていることがわかる。

6章. 拡散距離の推定法 (山村光司)

この章はやや異質で、昆虫の分散距離を推定するモデルの解説である。モデルには経験モデルと理論モデルがあり、それぞれの長所と短所が整理されていて分かりやすい。トラップを使ったデータから拡散距離を推定する方法をくわしく解説。

7章. 奄美大島におけるアリモドキゾウムシ根絶実証事業と残された課題 (杉本毅、瀬戸口脩)

8章. 性フェロモンと不妊虫放飼の組み合わせによるアリモドキゾウムシの根絶 (小濱継雄、久場洋之)

7章と8章はそれぞれ奄美大島と久米島で行われたアリモドキゾウムシの根絶パイロット事業の紹介である。ウリミバエの根絶成功の経験を生かし、世界でもほとんど例のない甲虫を対象にした不妊虫放飼法の適用である。原理はウリミバエと同じであるが、アリモドキゾウムシはガンマ線照射で完全に不妊化すると、性的競争力が極端に低下するという問題を抱えている。そこで、不完全に不妊化した大量増殖虫を放飼する方法がとられ、それでも根絶に不妊虫放飼法が使えることが示唆された。いずれも始まったばかりの根絶事業で、当然ウリミバエに比べれば情報量は少ないが、今後どのような研究が生まれるか楽しみである。

かつて、那覇のミバエ大量増殖施設でウリミバエの研究をさせてもらった私にとって、懐かしく読ませてもらったのと同時に、最近の害虫根絶事業の動向がわかって有り難かった。本書を通読して違和感を感じたことは、章ごとのスタイルの違いである。読者層をどこに想定するのか、意思統一がうまく行かなかったのかもしれない。ただ、別の見方もできる。不妊虫放飼による害虫根絶事業は、様々な分野の研究者を集めることで可能となる。事業の推進に直接かかわってきた垣花、杉本、瀬戸口、小濱、久場さん、常々基礎研究が応用にいかに関与するかを主張されてきた編者の伊藤さん、基礎や理論を担当した宮竹、山村さんなど、各自の事業へのかかわり方がそ

のままスタイルに現れているようである。読者としては全体を通読するよりも、好みの章だけ読むことを選ぶかもしれない。一方、ある程度事業に関わりのある読者は、全体を通読することを好むだろう。

ウリミバエの根絶事業は日本中の多くの昆虫研究者を巻き込んで、にぎやかに遂行された。これから始まるアリモドキゾウムシの根絶事業も、多分野の研究者を巻き込んで、基礎と応用の相乗効果を生みながら発展していくことを期待したい。応用は基礎によって動き、基礎は応用によって育つ。

(京都大学生態学研究センター・椿宜高)

**渡辺守著 (2007)「昆虫の保全生態学」東京大学出版会 190pp. 本体価格 3000 円
ISBN:978-4-13-062215-8**

約 50 年前に国をあげて拡大人工造林に走った。その結果、日本国土の 30% 弱に及ぶ面積が針葉樹の植林地に変えられ、そのツケがいま回ってきている。年間医療費が 3000 億円にも達する花粉症の蔓延、針葉樹の球果で育ったカメムシによる各種の果樹の吸汁被害、シカの激増がもたらす農林業被害や里山の荒廃、ノウサギの激減など、拡大人工造林がもたらした影響は大きい。このような国家レベルの生態系の攪乱・破壊を別にしても、生態学者たちは開発事業に伴う自然破壊を目の前にして、自分の無力さに空しさを感じたり、焦燥感に駆られているのではなかろうか。環境影響評価法 (1999) が施行されて、事業に伴う事前の環境評価も「事業者アセス」であり、専門家で構成される評価委員会も計画追認のための「環境アワセメント」に終わる場合が多いことに義憤を感じた著者が、「保全生態学」とはこうあるべきだと世に問うた本である。

これまでに出版された「保全」関係の教科書では「保全の理念」や「環境倫理」が唱えられても、その根拠となる基礎的な生物のデータの妥当性が定量的に吟味されることが少なかった。実際のところ環境アセスメントの事前調査では、採集した昆虫のリストでアセスが実施されたことになったりする。対象とする種や生物群集の生活空間の広がりを考えないために、高木層のみを植栽して下層植生を無視した「雑木林の創成」が行われたり、水を張った池に日本で越冬できないウスバキトンボが飛来しただけで「トンボ池の成功」になったりする。そこで本書は生物の保護、保全、管理に生態学が如何にかかわるべきかをチョウとトンボを題材に、個体群生態学の基礎的原理から個体数の推定のための標識捕獲法までを丁寧に解説している。それは「保全」にはこれらの基礎的素養が必須のものと考えからである。チョウやトンボの研究は決して「自由研究に毛の生えたもの」ではないことを読者は理解されると思う。

環境省レッドデータブックに絶滅危惧 I 類のヒヌマイトトンボがあがっている。著者は三重県宮川河口域での下水道浄化センターの建設に際し、本種の保護・保全にかかわってきた。幼虫時代を汽水で過ごす本種の生息地はヨシ群落である。建設にとまなう絶滅の危機を避ける

ため、新たなヨシ群落を創出しヒヌマイトトンボの定着化を成功させた。その過程で新しい個体数調査法を考案して数量的にも説得力あるミチゲーションを実現させている。本書は理論だけでなく実践を通じての裏付けを持って語られているだけに説得力がある。

本書の特徴の一つは、昆虫だけでなく、昆虫の生存を支える植物の生態学にも目を向けていることである。これは著者が若い時代に行ったナミアゲハの研究で培われた視点である。またその豊富な野外研究の体験から得た「目から鱗」のようなアドバイスもある。たとえばチョウにマジックペンなどで翅に標識をするとき、炭酸ガスの代わりに息を吹きかけると軽い麻酔の効果があるとか。またチョウの寝場所が分かれば、夜間に懐中電灯をもってチョウを見つけ標識すると非常に効率的だとか。野外で気温を測るとき、アスマン通風温度計は腕をのぼして、体から出来るだけ離して支えることなどの適切なアドバイスもある。本書では多数の写真と図表が掲載されており、各図に添えられた説明は親切で、図とその説明を読んでいくだけでも本書の内容がかなり理解できる。難を言えば写真が印刷の技術上の関係か鮮明さに欠ける点である。著者によれば、読者対象は大学 1-2 年生レベルの知識を持つ学生や高校の教師、アセス関係者だが、近頃のチョウやトンボの保全に関する学会発表では、野外調査の出発点となる方法論の甘さが目立つので、そのような研究者の卵たちにも読んでもらいたいというが、評者は卵どころか廢鶏に近いが、読んで大いに勉強になった。この分野に関心のある一人前の研究者にもお勧めするのに吝かでない。内容は以下のようなものである。

1. チョウの世界・トンボの世界—身近な昆虫と名も知らぬムシ：生活環／都市部の種／里の種／山の種／特殊な生息場所
2. 生息環境—「自己中」に徹する生き物たち：環境世界／生態系／生息環境としての植物群落／攪乱と破壊
3. 個体群動態—産めよ増えよ地に満ちた？：個体数の変動／個体数の推定／生息地の分析／メタ個体群
4. 生活史戦略—一人で生きていくわけではないけれど：生物的環境—動物／生物的環境—植物／無機的環境／生態学的地位／繁殖戦略／移動と渡り
5. 保全の理念と戦略—守ってあげたい心はどこに：生物多様性／絶滅過程／外来種／保護と保全・管理／環境影響評価法の手順／科学者と管理者／環境教育
6. 絶滅危惧種ヒヌマイトトンボの保全—一言うは易く行いうは難し：ヒヌマイトトンボとは／発見と対応／調査結果(生活史と生息環境)／創出地の設計と建設／創出後の調査／創出地への分布拡大／ミチゲーションの評価と提言

おわりに / さらに学びたい人へ / 参考文献 / 索引

(伊東市 桐谷圭治)

・公募カレンダー

例年学会事務局に送付される学術賞、研究助成、共同研究などの公募を昨年の締切日順にまとめました。
詳細については、学会事務局あるいは各団体にお問い合わせ下さい。

名称又は種類	授賞又は助成団体	2006年締切 (*印：2008年締切)
研究助成	財団法人 とうきゅう環境浄化財団 http://home.q07.itscom.net/tokyuenv	1月15日*
自然科学研究助成	財団法人 三菱財団 http://www.mitsubishi-zaidan.jp	2月4日*
コスモス国際賞	花の万博記念コスモス国際賞委員会	4月1日*
環境問題研究助成	財団法人 日本生命財団 http://www.nihonseimei-zaidan.or.jp	4月14日*
研究助成	公益信託 ミキモト海洋生態研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月9日*
研究助成	公益信託 四方記念地球環境保全研究助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月9日*
研究助成	公益信託 増進会自然環境保全研究活動助成基金 http://www.jwrc.or.jp/	5月9日*
国際生物学賞	日本学術振興会国際生物学賞委員会 http://www.jsps.go.jp/j-bionom.htm	5月16日*
研究助成	公益信託 富士フィルム・グリーンファンデーション http://www.jwrc.or.jp/	5月19日*
日本学術振興会賞	独立行政法人 日本学術振興会 http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/index.html	6月6日
藤原セミナー	財団法人 藤原科学財団 http://www.fujizai.or.jp	7月31日*
信州フィールド科学賞	信州大学山岳科学総合研究所 http://ims.shinshu-u.ac.jp/	7月31日
研究調査助成	財団法人 日本証券奨学財団 http://www.jssf.or.jp	8月10日
学術研究助成	藤原ナチュラルヒストリー振興財団	9月1日
沖縄研究奨励賞	沖縄協会 http://homepage3.nifty.com/okinawakyokai/	9月30日
木原記念財団学術賞	木原記念横浜生命科学振興財団 http://www.kihara.or.jp	9月30日
科学技術賞	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
研究助成	東レ科学振興会 http://www.toray.co.jp/tsf/index.html	10月10日*
日産科学賞	財団法人 日産科学振興財団 http://www.nissan-zaidan.or.jp	10月15日
笹川科学研究助成	財団法人 日本科学協会 http://www.jss.or.jp	10月15日
尾瀬賞	財団法人 尾瀬保護財団 http://www.oze-fnd.or.jp	10月31日
学術研究助成	財団法人 アサヒビール学術振興財団 http://www.asahibeer.co.jp/crs/philanthropy/ab-academic/index.html	11月8日
研究助成	財団法人 鹿島学術振興財団	11月20日
助成事業	財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会 http://www.expo90.jp/	11月26日
研究助成	財団法人 下中記念財団 http://www.shimonaka.or.jp/	12月10日



京都大学
生態学研究センター
Center for Ecological Research
Kyoto University

京都大学生態学研究センター
〒520-2113 滋賀県大津市平野2丁目509-3
Tel : (077) 549-8200 (代表), Fax : (077) 549-8201
センター長 高林純示

Center for Ecological Research, Kyoto University
2-509-3 Hirano, Otsu, Shiga,
520-2113, Japan
Home page : <http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp>

センターの動向



- 1) 清水勇教授が、2008年3月31日付けで定年退職されました。
- 2) 永田俊教授が、2008年4月1日付けで東京大学海洋研究所へ異動されました。
- 3) 山内淳准教授が、2007年12月1日付けで教授に昇任されました。
- 4) 谷内茂雄氏が2008年4月1日付けで、総合地球環境学研究所より生態学研究センターの准教授として着任されました。
- 5) 2007年度日本学術振興会外国人特別研究員の Arndt Telschow 氏が2007年11月28日で任期を終え、帰国されました。
- 6) 2007年度外国人研究員（客員教授）の Mouringh Willem Sabelis 氏が2008年1月31日で任期を終え、帰国されました。
- 7) 2008年度外国人研究員（客員教授）として、フンボルト大学理論生物学研究所研究員（ドイツ）の Arndt Telschow 氏が2008年4月1日から6月30日までの予定で滞在中です。
- 8) 2008年度日本学術振興会外国人招聘研究者（短期）として、シェフィールド大学教授（イギリス）の Michael Trevor Siva-Jothy 氏が2008年5月7日から5月28日までの予定で滞在中です。
- 9) 有村源一郎氏が、2008年2月1日付けでグローバル COE 准教授としてセンターで研究を開始されました。
- 10) 非常勤研究員の五味剣二氏が2008年3月31日で任期を終え、香川大学農学部へ異動されました。
- 11) 三浦和美氏が、2008年4月1日付けで研究員（研究機関）として赴任されました。

お知らせ

生態学研究センターでは、毎年共同利用事業の一環として、研究会や野外実習などの公募を行っています。詳しくは当センターのホームページ (<http://www.ecology.kyoto-u.ac.jp/activities/cooperative.html>) をご参照ください。なお、2008年度の公募は2008年4月22日で締切りました。